



W.A.Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第37号

雄叫びの残響

モーツァルトへの手紙 (その13)

会員番号 K.618 加藤 明



昨年はあなたの生誕260年祭という一つの節目の一年でした。

そして今年にはあなたの厳父レオポルトの没後230年祭にあたります。

さらに、全世界にあなたをかくも知らしめたモーツァルティアンの大恩人、あのR. V. ケッヘルケッヘルの没後140年に当たる年でもあります。

その意味で、本年はあなたにまつわる洪くて地味ですが正に「記念の年」であり、昨年が続いての節目の一年と言えるでしょう。

さて唐突ですが、どんな家族、家庭にも様子はさまざまですが、大なり小なり葛藤や不都合がつきまとうものです。

レオポルトの訃報がウィーンウィーンのあなたにかなり遅れて報せが届いたり、その訃報の後もついにあなたがザルツブルクのお墓に参拝することがなかったり、どこかギクシャクしていたことが、いや、むしろ深い溝が垣間見えますね。

しかし、あなたは生涯父レオポルトへの敬意と熱い思慕を持ち続けたし、姉ナンネルへの思いやりを捨てることはありませんでしたね（といっても、厳父の死後わずか4年ほどしかあなたには残された時間がなかったのですが……）。

つい3ヶ月ほど前のことですが、小生にとってあなたが心底敬愛していたレオポルトのような存在の恩師が静かに天寿を全うされ、そのお葬式でご遺族のご指名で弔辞を述べる事態が起きました。

受験を控えた高校三年時の一年間だけの担任でしたが、小生にとっては数ある師のなかでも半世紀にわたるご指導をいただいた深いところの恩師でした。

このK先生もあなたの大ファンであったことから、フォルテピアノによる協奏曲の珍しいCDをお借りしたり、あなたの音楽にまつわる様々なお話をしたりして、小生のあなたへの傾倒を手助けして下さいました。

そこで、本稿では3年ほど前、天王グリーンランドの道の駅で駅長をしていたところに、K先生との生前最後の遭遇となった出来事を記述した「駅長ブログ」を引いて面影を偲ぶことにしました。

あらためて、生涯あなたを愛聴した恩師の死を悼みつつ……。

※モーツァルトが父レオポルトに生前会ったのは、1785年5月にウィーンを訪れた時が最後で、再会までにすでに丸2年が経過していたこととなります。当時の交通事情やモーツァルトの忙しさを推察すると、不自然な空白期間とは言えないかもしれません。

【恩師の不意なる呼び声】

駅長ブログ 2014.5.12記

小生は高校の三年間を前途洋洋たるイメージからほど遠い、「いったい、俺はこの先どうなるんだろう？」といった漠然とした不安と頹廢的とも言える憂鬱な気分でも過ごした。

高校3年ともなると、大学受験の競争に駆り立てる校内モードが露骨になり、墮ちこぼれ組の小生に

周囲も振り向く余裕すらなくなっていたように思う。

そんな中、卒業を間近に控えた一月に病床にあった父が他界した。

父の葬儀のときに、思いがけず担任のK先生が友人のKenくんと一緒にお悔やみに来て下さった。

そのことが、きっかけだったかは定かでないが、それから卒業までの期間に、一度Kenくん共ども南通りのK先生宅に招かれ、押しかけた。

お宅の書齋に通された瞬間が忘れられない。それは、普段、生臭い進路指導に明け暮れているK先生のイメージを一変させる出来事であった。

確かフランス文学系と記憶しているが、書齋の壁一面に膨大な本が汗牛充棟よろしくピッチリと納まっていたからである。

なかならず、白水社刊だったと思うが、完璧に揃った「ポール・ヴァレリー全集」が眩いほどの光沢を放って中央に鎮座していたのを憶えている。

Kenくんは多分そのときポール・ヴァレリーを知らなかったようだ。

変にませていた小生は、K先生の得意げなヴァレリー論、確か「精神の政治学」とかいった著作などについてのお話に興味津々と聴き耳を立てたことを懐かしく思い出すことができる。

K先生は当時からどこかお洒落で、他の先生と一味違っていた。

奥目で二枚目だったことだけに止まらない、格好良さが感じられたものだ。

特に、マンツーマンを信条とする生徒との向き合い方などは、フランスの最高の知性であるヴァレリーなどから磨かれたものだったのかもしれない。

そんなK先生はあのお宅訪問以来、小生の担任教師という枠から外れ、一人の知識人として憧憬の対象に変身していった。

K先生は卒業直前に大黒柱の父を喪った18歳の青二才に、何らかの気づきを与えるために、わざわざお宅に呼び寄せご馳走してくれたのだろう。

そんな師の優しさが判ったのはそれほど昔ではないのが情けないが……。

それにしても、K先生ほど長く恩師で居続けてくださる方はいない。

高校卒業して45年余を経過している現在も、わが師であり、大兄であることに変わりはないのだ。

モーツァルトが大好き、という偶然ながら小生と趣味が一致し、いつぞやはモーツァルト時代のフォ

ルテピアノによる珍しい協奏曲全集を鼻高々に貸してくださったK先生（M. ビルソンのフォルテピアノ アルヒーフ盤）。

奥様に先立たれるというご不幸に見舞われ、その悲しみの癒えぬ間に同級生のSくんの訃報をお知らせした時には、人目もはばからず号泣したK先生。

御歳81歳になられたK先生を想うことは、いまや日常化しつつある。



その日は産直施設《食菜館くらら》の三周年感謝イベントの最終日だった。

数あるイベントの一環として、恒例となった店頭での「豚汁の振る舞い」を来場客に施している最中の一瞬の出来事であった。

200食の豚汁を振舞いはじめて佳境にはいったころ、突如として、K先生がお嬢さんに手を引かれながら、小生の目の前を通過しようとしたのだ。

K先生は豚汁の振る舞いを受けるラインではなく、一般の来場客が通る入り口から正に店に入ろうとしているところであった（K先生を発見した途端、小生の振る舞いの作業が停止してしまったため、提供の流れに影響がでたことを後で知った）。

真っ先に目に入ったのはお嬢さんの方だった。こちらを向いて、何やらお辞儀をしている前方の女性がいることに気づき、それがK先生のお嬢さんであることをすぐに思い出した。

と同時に、隣で彼女の後に引かれるようについて行く、いかにもゆったりとした構えの老人がK先生であることも。

「あっ、K先生！・・・」、と小生はおよそ場違いな大きな声でこちらに気づかずに店に入ろうとするK先生を呼びとめた。

そのK先生を呼んだ小生の大きな声で、お嬢さんが父上に、すぐ目の前に教え子がいることを諭すように伝えているのが判った。

そして、ようやく事情を察知し、スローモーションビデオを想起させる、弛緩した動作でこちらを振り向いたK先生は、往年の鋭い眼差しで小生を睨みつけながら、驚くほど大きな叫ぶような声で言い放ったのだ。

『おお！加藤くん、元気でがんばっているかぁ!!』

『……………』

あまりの老いの変貌ぶりに一瞬言葉を失った、といていい。

この恩師の不意なる叫びがしばらく小生の耳朵を揺らし続けたのは言うまでもない。 end

松本清張の「モーツァルトの伯楽」考（上）

会員番号 K.203 松田至弘

たしか、『モーツァルト時代の寵児への旅—』（冬至書房）を2013年1月に出版して、半年ぐらいたってからだったと思う。

古書店で、作家松本清張作の『草の径』という文庫本（1994年刊）をみつけた。

私は、松本清張作品の愛好者で、これまでジャンルを問わず数多くの作品を読み、映画化された作品（DVD）にも気を配り視聴してきた。しかし、このタイトルに出会ったのは初めてであった。

手に取ってみると、この本は雑誌『文藝春秋』に連載（1990年1月号～91年2月号）された7篇を集めた短編集で、様々な個性的人物の晩景を描いたものだった。購入することに決めたのは、そのなかに「モーツァルトの伯楽」という作品が含まれていたからである。

松本清張に、モーツァルトを扱った作品があるとは考えたこともなかったのに、驚きを禁じ得ず、深甚なる興味を持って一気に読了したことを思い出す。

今は、この作品と出会ってから4年を経たことになるが、この度この文を書くに当たって、再度注意深く読み返し一考察を試みてみた。

＊

初めに、この作品の登場人物と筋書きについて記してみよう。

登場人物は、東京からウイーンへやってきた旅行者の男とそのウイーンに長く住んでいて地理にあかるい日本人女性の通訳だけである。

男の職業は著述業で、モーツァルトとエマヌエル・シカネーダーのことを音楽芸術論や作曲家論ではなく人間観に立って書くため、取材に訪れたのであった。

11月初めの寒い日、案内をする通訳と男は、チャーターしたタクシーに乗り1日かけて、聖マルクス墓地（モーツァルトの墓がある）、アン・デア・ウイーン劇場、シカネーダーの旧邸、聖シュテファン大寺院の十字架礼拝堂、ネルバシェハウス（シカネーダーが息を引きとった家）、ヴェーリンガー墓地（シカネーダーが葬

られたと言われている）などを巡る。



聖マルクス墓地のモーツァルトの粗末な墓碑

男は旧式のテープレコーダーを持ち、マイクを握って、取材対象についての史実や印象・感想、自分の考えなどを口述し、通訳の女と会話をする。録音をとるのは、それを取材メモとして記録し、後で再生・整理して使用するためであった。途中、この口述は、タクシーのなかでもコーヒーを飲みに入ったカフェでも続けられていく。――

この作品は、松本清張には珍しい実にシンプルな物語である。主人公の男の取材活動と大変興味深い複数の題材とをうまく組み合わせて使用している。

次に、この作品の核心的と思われる内容を整理して示してみる。

その1. モーツァルトの死の原因

ウイーンの宮廷作曲家アントニオ・サリエリやフリーメイソン、モーツァルトの妻コンスタンツェによる毒殺説を、それぞれについて絶対あり得ないとして否定する。

その上で、モーツァルトは、友人ヴァン・スヴィーテン男爵が処方した梅毒治療薬の分量ミスにより、慢性の水銀中毒になって死んだとす



エマヌエル・シカネーダーの肖像（フィリップ・リヒターの銅版画）

る説を正しいと断言している。

その2. シカネーダーの再評価

従来、シカネーダーは、モーツァルトの「魔笛」の台本作者か劇場主（コヤヌシ）程度にしか扱われておらず、「多芸多才」とされる場合も、この言葉は軽蔑の意味で使われてきたとする。

しかし、実際のシカネーダーは偉大であり、

その活躍はもっと広く知られなければならないとし、生涯と栄誉について明らかにしていく。

シカネーダーを俳優・作家・演出家・興行師を兼ねた天才として捉え、そのシカネーダーと組んだモーツァルトは幸運だったとしている。

その3. オペラ「魔笛」の解釈

シカネーダーが台本を書きモーツァルトが作曲した「魔笛」は、フリーメイソンのオペラだという通説を否定する。

シカネーダーが一座を連れてハンガリーのブダペストに行き、そこで数回旅興行を打ったことを指摘し、その際に、古代ペルシアのゾロアスター教や東方の神話・民話について聞き知ったに違いないと推測している。

シカネーダーはこのゾロアスター教から「魔笛」の材料を得て、一つの童話劇に仕立て上げ演出を工夫したとする。従って、「魔笛」とフリーメイソンとは関係ないと主張している。

この作品のなかで男が口述した以上の内容は、作家松本清張自身の見解、あるいは仮説と思われるので、次号で詳しく考察してみることにする。

お客様を前にして演奏者は

会員番号 K.10 畠山久雄

全員がモーツァルトの音楽を聴くのを趣味としているこの会であるが、中にはモーツァルトを演奏してみたいという人も混じっている。何を隠そう、私は演奏もしてみたい派であり、これまで何回か皆様のお耳を汚しているかも知れない。

さて、演奏者は何を考えて、どういう気持ちで聴衆の前に立つのか、あまり知られていないのではないかと。聴く人がそれを知ったところで「何の得があるか」と問われると身も蓋もないが、演奏者の言い訳を綴ってみることにした。

多くの演奏者は緊張しながらも、にこやかにお客様の前に立つが、心の中では、ミスをしないうか、体調は万全かなど不安な気持ちでいっぱいである。

実際にそのようなトラブルに遭遇することは滅多にないが、譜面に関するトラブルは見た人がいるかも知れない。演奏しようとしたら、譜面台の上には違う曲の譜面、あるいは譜面台の上には何もなかったなどは残念ながら現実にある。こうなると演奏者は開き直って一旦引込み、出直すしかない。たいていの場合、譜面を片手にニヤニヤしながら再登場するが、失敗したのに、どうしてにやけてしまうのかよく分からない。恥ずかしくても出ていって演奏しなければならない照れ隠しなのであろう。

失敗談が先行してしまったが、演奏者は何を目的に演奏するのであろうか。自己満足も少しはあるが、もちろんそればかりではない。曲を聴くなり演奏をしてみて、「これは良い曲だ、

できるだけ多くの方々とこの思いを共感したい。」というのが大方であろう。

「こんなに難しい曲を演奏できることを自慢したい。」という気持ちがあってもいいし、協奏曲にあっては、それも目的の一つとなっている。しかし、技術が先行してしまうと、つまらない演奏と感じるであろう。そのような演奏を専門用語では『クレーテはあるがトーハがない。』と言う。翻訳すると『テクはあるがハートがない。』=『テクニック！いわゆる演奏技術はあるが、ハート！いわゆる心がこもっていない。』となる。余談であるが言葉を逆に言う習慣は、バンドマンを中心に昭和45年頃から流行っていたと記憶している。

では、何が良い演奏か、「自分で楽しいと感じなければ、良い演奏じゃない。」という意見もあるが、汗だくになって精一杯演奏に努めているんだ！アマチュアのように自分の演奏を楽しむことはできない！とプロがつぶやいている。楽しそうに演奏しているが、プロは苦しい場面を見せないようにしているのかも知れない。

では「自分で楽しいと感じない。」のがプロで、「楽しいと感じている。」のがアマかということ、決してそう単純ではない。プロの演奏者は

常に良い演奏を期待されているので、楽しいと感じる余裕は少ないと思う。ご承知のように、プロでもあまり達者でない人、アマでありながらプロ並みの演奏をする方もいる。プロ並みの演奏をするアマは、楽しいと感じることは少ないのではと感じている。

見渡すと、プロとアマの定義は演奏の内容ではなく、音楽で生計を立てているか、音楽以外で生計を立てているかの違いのようです。

そろそろ話をまとめましょう。沢山のミスをしながらかいている人を楽しくさせる演奏もあれば、聴いてつまらないノーミスの演奏もある。良い演奏とは何か、様々な尺度や意見がある中で、私は聴いている人に“納得してもらえたら”良い演奏と考えることにしています。したがって、聴く人にうなずいてもらえる演奏か・そうでないかが、良い演奏であるか・そうでないかの、一つの尺度と考えることにしています。

上手な演奏家が数多い中で、「こういうモーツァルトもあるね。」と、広場の皆様にうなずいていただければ最高に幸せ、少しでも共感していただけたら、演奏者冥利に尽きるであろう。

酒とモツの日々 (37)

会員番号 K.488 佐藤 滋

40年ぶりにヒルティの「幸福論」を読み直してみました。こう見えても私だって「恥の多い生涯」を過ごしてきたので、これまで様々な「幸福論」に目を通してきました。けれども、単純で愚かな自分にとっては精神の渴望などはお呼びでなく、もっぱら物欲・享楽欲の解消こそが課題なのであります。そんな愚人にも共感を持って受け容れられたのがヒルティの著作だったのです。(その論をざっくり言えば「週6日、額に汗しての労働こそが幸福への道である」ということ) 小さな私が、なんとか社会生活を全うできた背景には、この論が少なからず煩惱や出来心を制してきたのだと思っています。

さて退職した今、あらためてこの「幸福論」を読み返してみたのは、労働から解放された人間にとって「幸福」への道はどこにあるのか、もう一度この本からヒントを得たいと思ったからです。

久しぶりに読む幸福論は決して読後感の良いものではありませんでした。それは私の人生が失敗である、というのではなく、時代や環境、価値観の違いが幸福の概念すらも変えてしまう、ということでした。例えば働きもせず「体裁のいい口実のもとに、ひどく時間をつぶしているのは芸術だ。」という決めつけに、どうにも自分が世間の穀潰しになってしまったようで、肩

身の狭い思いがしてくるのです。

ヒルティほどの知識人でさえ、当時の堅固な階級社会、生産性重視の資本主義の台頭から影響を受けざるを得なかったのではないかと読み進みながら、ふと彼の言う「労働」を、今の成熟社会・高齢化社会における「生きる意味」と読み替えることもできるのではないかと、思えてきました。平均寿命が短かったモーツァルトの時代、「生きる意味」という認識は存在しなかったでしょう。けれども彼にとって、作曲は「労働」というより今で言う「生きる意味」だったのではないかと。

「とめどなく迫ってくる音楽の波を、モーツァルト自身が十分に味わう余裕もないまま、とにかくこの世に現実として残すべく書き下ろした。それが彼の使命であり、生きる意味でもあった。」(千住真理子「歌って、ヴァイオリンの詞2」)

自作が上手に演奏されて、人びとの喝采を得ることが彼にとっての「幸福」ではなかったか。彼は、偉大な芸術作品を後世に残すために働く、などとは考えてもいませんでした。ただ、彼にとって正しいと思われる生活を必死に生きたにすぎないのです。

モーツァルトのような天才でなく星の数ほど

の凡百の音楽家にとっても、たとえその行為が非生産的とヒルティに蔑まれようが、そこに彼が「生きる意味」を見いだせるなら、それは額に汗する立派な「労働」と同じではないか。アマチュア活動も地域活動もボランティアも、そこに「生きる意味」があれば、みな天から認められた労働なのではないか。そう思い直してヒルティを読み続けていると、素敵な文章に出会うことが出来ました。「喜びは追求するものではない。喜びは正しい生活にあっては、自然にそこに生じてくるのである。」 職業としての仕事は無くても、生きる意味を実践することによって自然に生じてくる喜びこそが、正しい生活における「幸福」への道だったのです。

さて、モーツァルトにとって「幸福」への道を歩む原動力の一つは仲間とのお酒でした。モーツァルトは酒癖が悪かったといわれます。確かに天才と呼ばれる人、また、そうでなくてもストレスがたまりやすい人は、総じて酒癖が悪くなるのでしょうか。

人格者であるヒルティも決して飲酒を否定してはいません。ただし「朝のビール」は禁じています。まあ当然ですが。

事務局より

私がモーツァルト広場に入会して14年、そして編集後記を担当して今回で24回目となりました。自分にとっては次回が25回目の節目、そして来年が15年目にあたります。35年の生涯だったモーツァルトの約半分。もう半分、まだ半分。大天才に追い付け追い越せ。届かないのはよくわかっているけどこの気持ちは変えないでいろいろなことにチャレンジする1年にしたい。7月は自分の誕生日、本日のコ

ンサートをきっかけにまた一つステップアップしてゆきたいですね。でもステップアップの前にまずは深呼吸。今日の演奏で心を落ち着かせて次へ向かうことにしようかなと思ってるところです。

ちなみに僕がトロンボーンを吹き始めて今年で30年。これもまだまだ続けなくては。追伸。年数を気にするということは年を重ねてきた証拠でしょうか……。 (K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております(H29年7月現在95名)

モーツァルト広場

検索

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000 (諸会費、別途)

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058

又は 本田 (事務局) 080(1673)8322